

スペンセリアン・ペンマンシップによる筆記体書法 ーその史的展開と基礎理論ー

鈴木貴史

東京福祉大学教職課程支援室(池袋キャンパス)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-7-12

(2015年1月7日受付、2015年2月12日受理)

抄録: 19世紀後半の米国における筆記体書法であるスペンセリアン・ペンマンシップ(以下、「スペンセリアン法」) 他人に読みやすい文字の美しさと、文字を書く速さの両立を目指した筆記体書法であった。しかしながら、従来のわが国における筆記体は、速記に重点が置かれ、非正規の書体として誤解される傾向がみられた。そこで本稿は、スペンセリアン法による筆記体書法を正確に理解することを目的として、その史的展開と基礎理論である(1) 姿勢、(2) ペンの持ち方と動作、(3) 形、(4) 7原則の4項目について解説した。スペンセリアン法において、他人に読みやすく、美しい文字を書くことを徹底的に追及するという姿勢は、文字言語によるコミュニケーション能力の一つとして現代においても評価できるものであり、今後、筆記体の意義を再考するための一助となるものと考えられる。
(別刷請求先: 鈴木貴史)

キーワード: 英語教育、ペンマンシップ、筆記体、スペンサー、書字教育

はじめに

近年、小学校に外国語活動が導入されて英語教育が重視されるなか、小学校だけでなく中学校以上の英語学習においてはオーラルコミュニケーションが重視されている。たとえば、現行の「中学校学習指導要領(以下「指導要領」)」における外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」とされており、音声に関わる「聞くこと、話すこと」、文字に関わる「読むこと、書くこと」の順に記述されている(文部科学省, 2008)。このように、「指導要領」における記載順からも外国語科における音声重視の傾向を窺うことができる。

とりわけ、「書くこと」に関して軽視される傾向が著しく、筆記体については、「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、「文字指導に当たっては、生徒の学習負担に配慮し筆記体を指導することもできること」とされ、「中学校学習指導要領解説(外国語編)」においても発展的な内容という位置づけである(文部科学省, 2008)。その結果、現状において、多くの学生が大学入学までに筆記体を習っていないという状況が報告されている(豊永, 2011)。こうして、かつ

て英習字とよばれたペンマンシップ、すなわち筆記体によって速く美しく手書きする技能は、今や瀕死の状態にあるといつてよい。

中等教育において筆記体の指導が積極的に行われない主要因として、音声によるコミュニケーション能力の重視、情報入力機器の発展に伴う手書き文字の実用性低下、さらに米国をはじめとした英語圏における筆記体の地位低下などが考えられる。

しかし、筆記体が重視されないことの背景には、上に挙げた環境の変化による外的な要因だけではなく、筆記体そのものに対する誤解や、その意義について理解不足があるものと思われる。

そこで、本稿においては、こうした筆記体に対する誤解や理解不足を補うことを目的として、19世紀の米国における筆記体書法の代表ともいえる *Spencerian Penmanship* (以下「スペンセリアン法」) に注目し、筆記体の意義について再考を試みる。スペンセリアン法とは、*Platt Rogers Spencer* による体系的な英習字理論であり、この理論が後に *H. C. Spencer* を中心とする5人の息子らによって “*Spencerian Key to Practical Penmanship*” (1866, 以下 “*Key*”) としてまとめられた。

本稿においては、この “*Key*” のほか、ワークブックである “*The System of Practical Spencerian Penmanship*”

(1864, 以下“System”)、およびその解説書である“Theory of Spencerian Penmanship for Schools and Private Learners” (1874, 以下“Theory”)を参照しながら、スペンセリアン法の概要及び書法について解説する。

なお、それぞれの資料の記述に相違点がみられる場合は、より新しい年代の記述であること、学校や家庭向けに平易な書法を提供しようとする趣旨であることを踏まえ、原則的に“Theory”の記述を優先することとした。

スペンセリアン法の概要とわが国における史的展開

吉田(1932)では、ペンマンシップを意味する英習字について、「英語の基本字たる Alphabet 二十六字及びこれに附随する記号数字の単一的若しくは、総合的書き方を研究する一つの技術である」と定義されている。19世紀におけるペンマンシップの代表ともいえるスペンセリアン法の母体となる書体は、17世紀中葉に英国で生まれた Roundhand とよばれる流暢かつ装飾性の高い書体である(図1上段)。先行研究において、スペンセリアン法(図1下段)は、その「Roundhandの実用性を受け継ぎ、之に前腕運筆による速書法と適度の装飾性を加味したもの」であるものとされ、19世紀のアメリカで広く普及した書体および書法であるとされている(森義, 1970)。

それでは、わが国における筆記体書法の受容について概観してみたい。まず、スペンセリアン法は、1872(明治5)年に大学南校教頭フルベッキの教科書具申で『スペンセリアン習字本』として紹介されている(倉沢, 1963)。この『スペンセリアン習字本』を特定することは困難であるが、望月(2007)は、ワークブックの“System”のことであると推定している。しかし、明治学制期に“System”が翻訳された形跡はみられず、スペンセリアン法に関する当時の文献で現在所蔵が確認できるものは、国立国会図書館及び筑波大学附属中央図書館所蔵の“Key”2冊のみである。

学制期以降、筆記体の学習は英習字と呼ばれ、主に中等教育や実業教育において教授されていた。しかし当時の資料として、1873(明治6)年の吉田(1873)や嶋(1873)では、

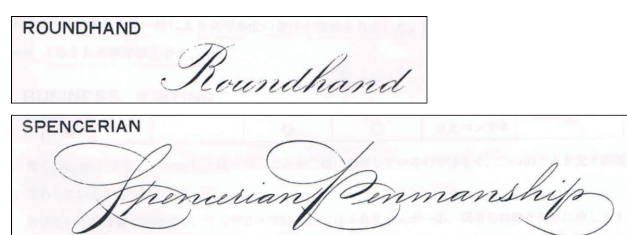


図1. RoundhandとSpencerian 書体(森義, 1970より)

スペンセリアン法の理論を忠実に紹介したものではなく書体も異なっている。たとえば、吉田(1873)で示された文字の傾き角度は、50度と45度であり、後述するスペンセリアン法で提示された角度や基本原則も異なっていることから、スペンセリアン法だけが普及していたわけではないことが確認できる。

その後、明治10年代後半の学校教育における実用性重視の動きと相俟ってスペンセリアン法の翻訳本が出版され始めた。スペンセリアン法を紹介したものとしては鈴木(1884)があり、ワークブックである“System”の翻訳本も出版された(スペンセリアン著・森訳, 1885)。

こうして明治20年代になるとスペンセリアン法が広く普及し、東京高等師範学校附属小学校中等科では、「習字ハ思想ヲ可視的二表出スルニ必要ナル文字ノ書方ヲ練習スルモノニシテスペンセリアンペンマンシップヲ用ヒ一学年間大凡二冊ヲ習ハシム又書取ト連絡シテ白紙上ニ練習セム」とあり、この時期においてスペンセリアン法が推奨されていることが確認できる(東京茗溪会, 1892)。

このスペンセリアン法の理論と、現代のわが国で一般的に使用される筆記体(本稿では、「中学校体」と称する)を比較した場合に際立って異なる特徴を挙げると下記の6点に要約できる。

- 特徴Ⅰ 速記術の一つではあるが、なぐり書きや走り書きの類ではなく、公的な文書にも用いられた書体であり、美しさ、読みやすさも追求していたこと。
- 特徴Ⅱ 小文字では、斜線の角度、文字のサイズなどを細かく数値で規定し、一点画ごとに分解して学ぶ方法(いわゆる「分解結合法」)であること。
- 特徴Ⅲ 理論上は、すべての小文字が続け字可能であること(ただしi, jの点およびtの横線を除く)。
- 特徴Ⅳ 大文字は、shading(文字の陰影)を駆使して線の太さに変化をつけているため、高い装飾性と豊富なバリエーションが可能であること。
- 特徴Ⅴ 上記の特徴Ⅰ～Ⅳを体得するためのワークブック(練習帳)には、現代の英語ノートのように4線3行ではなく、6線5行(ベースラインを基準として上3行、下2行)を使用すること
- 特徴Ⅵ ノートは20度前後左に傾けて筆記していくこと。

これらの特徴の詳細については後述するが、とりわけ重要なものは、特徴Ⅰである。これは、冒頭で述べた筆記体に対する誤解の一つであり、富山(2007)は、「日本語の文化圏では半ば公な文書においては楷書体が要求されるよう

に、そうした場面(中略)では、「楷書体」でない筆記体は好ましくない」というネガティブな考えが広まっていると指摘している。

しかし、当時の米国におけるペンマンシップ教育は、Northend (1874) で示された“Good writing is characterized by legibility, rapidity, and beauty.” にその要点が端的に表れているといつてよいだろう。わが国においては、1876 (明治9) 年ファンカステールによって『教師必読』として翻訳され、ここでは「凡ソ能書ノ名ハ其書草スル所ノ字々他人ヲシテ読下シ易カラシメ之ヲ書スル頗ル快速ニシテ且ツ美巧ナルコトヲ得タル者ニシテ始メテ之ニ下スニ此名ヲ以テスヘキナリ」と訳されている(ノルゼント, 1990)。つまり、ペンマンシップでは、「快速ニシテ且ツ美巧ナルコト」が重要であった。これはスペンセリアン法でも同様であり、たとえば、“Theory” では、“Scrawls that cannot be read may be compared to talking that cannot be understood” と述べられており、なぐり書き、走り書きを戒めている。

そもそも、ブロック体とは英語圏では、“printing”であり、「活字体」の訳が相応しいといえる。一方の「筆記体」の“cursive”は、その訳語のとおり、手書きによる続け字を特徴とする書体である。両者の最大の相違点は、「ブロック体＝正規の字体、筆記体＝非正規の字体」という図式ではなく、続け字で書くか否かにあるといえる。つまり、手書きで公的な文書を作成する場合は、美しい続け字で書くことができる筆記体こそが正式の書体なのであった。

要するに、本来の筆記体は、速く書くことよりも他人が読みやすく美しい文字を書くことが優先されるべきなのであり、スペンセリアン法は、まさにこの美しさ、読みやすさを保ちながら速くスムーズに書くことを目指した書字法であった。

その後、明治後期から大正期以降、鉛筆、万年筆等の登場で筆記具が変化したことに伴い、装飾性の高いスペンセリアン法よりも商業字体と呼ばれた実用的なビジネスライティング(Business Writing, Commercial Cursive)が普及した。これは、shadingを用いず、単一線(原則的に同じ線の太さ)によって書かれる書体であり、現代における筆記体に近い書体である。その後、タイプライターの登場も加わり、実用性がますます重視されるなかで、筆記体書法におけるスペンセリアン法の相対的地位は低下していくのである(森義, 1970)。

当時の状況について、たとえば、佐々木(1912)は、その頃、「所謂直立体を書くことが流行し出した」と述べており、さらに、Spencerian Styleを書く人も少なくなったため、「従って今日は、文字の傾斜の度は、実に種々で、たとひ同

一人と雖も中々一定しない」状況であったと述べている。

こうした実用性偏重の傾向は、昭和以降の英語教育でますます顕著となり、戦後の中学校で模範とされた中学校体が採用されていった。中学校体は、文字全体が右斜めに大きく傾いていたスペンセリアン法と比較して、傾斜角度が小さくなっており、立ち上がったような形状になっている。これは、装飾性よりも実用性を重視したため、その書法にも大きな変化が生じたことが要因と考えられる。たとえば、篠田(1948)では、英習字の目標として、「字体の正確さと運筆の軽快さ」を挙げている。ここでは、「美しさ」や「読みやすさ」といったペンマンシップで重視された理念が欠落している。さらに、篠田は、「従来、清書帳を傾斜させて練習する方法が行われているが、これは文字を一定の角度に傾斜させて書くための便法であると思われるが、これは正しい書き方ではなく、清書帳の傾斜に気を取られて、姿勢も崩れて来るし、文字も委縮する様な結果になることが多い」として、用紙を傾けることを採用せず、逆に清書帳に予め15度から20度の斜線を引いて書く方法を推奨している。

こうして、わが国の学校教育においては実用性と装飾性を兼ね備えたスペンセリアン法による筆記体書法は忘れ去られ、筆記体は、速記の手段としての性格を強めていったと考えられる。以上、わが国におけるスペンセリン法の史的展開について駆け足で追ってみたが、次にスペンセリアン法の基礎理論を確認していきたい。

スペンセリアン法の基礎理論

(1) 姿勢 (Position)

姿勢については、右の腕と手指がスムーズに動かせる姿勢がよいとされる。その姿勢は、わが国の書字教育と同様に、肩を丸めずに背筋を伸ばしておくことが重要であるとされている。

しかし、わが国の書字教育と異なる点は、体の向きに対する用紙の傾きである。この紙の傾きは、机に対して体をどの方向に向けるかという問題と密接に関連している。

わが国の書字教育においては、原則的に机と正対する姿勢が一般的であるが、スペンセリアン法では、①“Front”(正面姿勢)、②“Left-side”(左側姿勢)、③“Right-oblique(またはRight-side)”(右側姿勢)の三種があるとされている。

一般的な正面姿勢(図2)は、まず、両足を床にしっかりと着け、机にもたれないで座る。以下、図2から図4では、それぞれの姿勢の体の向きを太い矢印で示している。右の前腕部を軽く机に置き、手首は机または紙の上に置かずに浮かせる。そして、ペンをもった右手指は、薬指と小指の爪を紙に付けて支え、用紙は、左手で支える。

正面姿勢で重要なことは、先ほど述べた用紙の傾きである。机と正対する正面姿勢では、ノートや紙の下辺を机の手前の縁に対して20度左に傾けるとされている。この傾きは、次に述べる指(食指)の動作(Movement)に大きく影響するため極めて重要である。以下、図2から図4の中の細い矢印が食指を動かす向きを示している。

次に、左側姿勢Left-side (図3)は、主に立った姿勢で書く場合に用いられる。とりわけ、机の上で傾けることができないような大型のノートや紙に書く場合に有効である。正面姿勢と異なり、机の上で用紙を傾けないで真っ直ぐに置く。そして、右足を一步後ろに下げ、自分の体を右に開き、正面姿勢を基準として右斜め前方を向くように構える。つまり、左側姿勢は、このように用紙に対して自分の体を傾けることによって、用紙を傾けずに正面姿勢で用紙を傾けた状態と同じ態勢をつくるのである。

つぎに、右側姿勢“Right-oblique (またはRight-side)”は、図4に示したように机に触れずに左斜め前(左側)を向く姿勢である。この姿勢の特徴は、用紙を左に90度回転させて横置きにし、用紙と側面と机の下縁とが並行にな

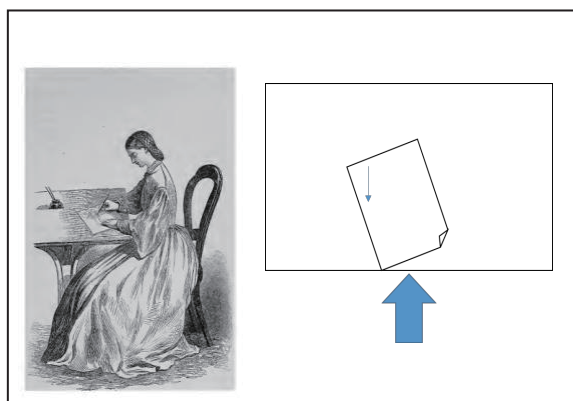


図2. 正面(Front)姿勢(“Key”より)

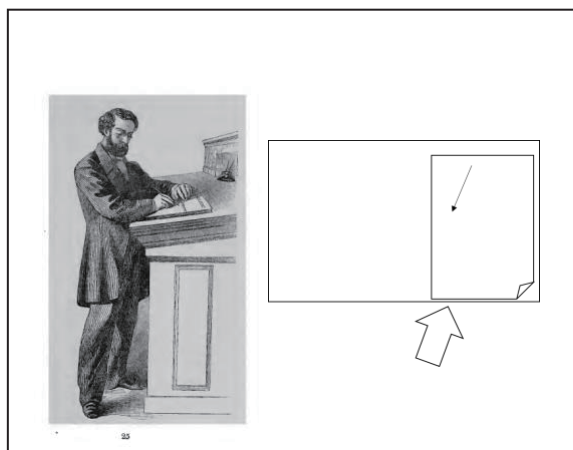


図3. 左側姿勢Left-side (“Key”より)

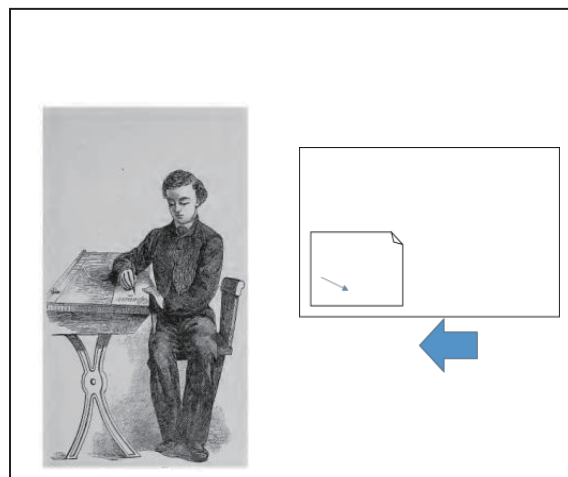


図4. 右側姿勢Right-oblique (Right-side) (“Key”より)

るようにする。こうすることで、体を左に向ければ、体と用紙も左方向を向いていることになる。この時の注意点は、用紙を体の真横に置くのではなく、右腕の位置に当たるやや前方(机上の位置でいえば、左側)に置くことが重要である。

以上のような、目的に沿った正しい姿勢を保つことで、食指を正しい方向にスムーズに動かすことができるとされている。

(2) ペンの持ち方(Holding the pen)と動作(Movements)

自由に手を動かすには、(1)で述べた姿勢に加えて正しくペンを持つことが重要である。こうした正しい方法が習慣的かつ容易にできるようになるまで持続的に訓練することが必要であるとされている。スペンセリアン法では、頭で考えたことを表現するというよりは、むしろ、繰り返し丁寧に練習して書字法を体得することにより、しなやかに従順に書けるように変化するとされている。

正しいペンの持ち方は図5に示したとおりである。その上で動作(Movement)すなわち運筆の方法には、①手指運筆法(Finger Movement)、②前腕運筆法(Fore-arm Movement)、③連合運筆法(Combined movement)、④全腕運筆法(Whole-arm Movement)の4種がある。

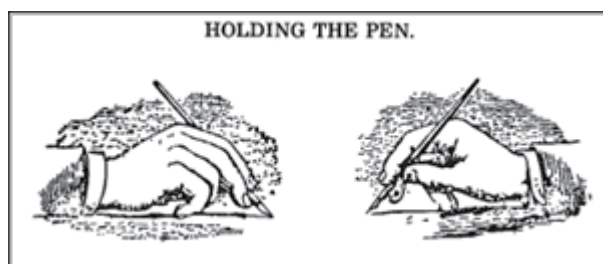


図5. ペンの持ち方 (“System”より)

まず、①手指運筆は主に、食指、中指、拇指の動きによって運筆する方法で、斜線を書くことに使用される。「(1) 姿勢」で述べた正面姿勢では、紙を傾けているため、食指を縦方向に上下運動することにより、おのずと斜線が書ける仕組みになっている。そのため、左側姿勢、右側姿勢は、この右手指の上下運動により斜線がスムーズに書ける角度が最も適した姿勢であるといえるだろう。

次に、②前腕運筆法は、前腕の肘に近い部分を机の上に付け、前腕の動きによって文字を書く方法である。薬指と小指の爪を紙の上に置いて滑らせるように書いていく。これは、あらゆる方向の線を書くことが可能であるが、特に横方向への移動に適している。

この両者を合わせた運筆法が③連合運筆法であり、これが最も実用的な書法であるとされている。最後に、④全腕運筆法は、肘をわずかに机から持ち上げ薬指と小指を滑らせて書く方法である。これは、肩から指まで自由な動きが可能であり、大文字に適している。

要するに、運筆法は、小文字を書くための③連合運筆法を確実に身につけ、大文字を書く際の④全腕運筆法と組み合わせることで美しくスムーズに書けるように練習することが求められる。

(3) 形 (Form)

欧米では伝統的に文字は図形描画の延長であると考えられる傾向がある。たとえば、ペスタロッチ(1960, 初出1801)は、「習字より先に図画をやらせると、それによって字の形を正しく書くことが児童にとって途方もなくやさしくなり、時間の大きな節約になる」と述べており、直観に基づき正確な図形描画を習得した上で、文字の練習をすることを推奨していた。

スペンセリアン法においても、“Key”には、“Writing and drawing are sister arts, children of form, deriving from her their common element, the line, with all its beautiful variations”との表記があり、“writing”は“drawing”と類似性があるとされている。既に述べたようにスペンセリアン法は、いわゆる分解結合法である。分解結合法とは、文字を分解して字画ごとに練習し、それを結合させて字形を系統的に学習する書字教育法である。スペンセリアン法では、文字を書く前には、文字を構成する部分、すなわち線の種類、線の傾き、線の結合に関して正しい概念をもたなければならないとされている。すなわち、正確に美しく書く写すためには、そのサイズ、形状を理解した上で、書法を身につけていくことが求められるのである。そのため、まずはスペンセリアン法で使用される線の種類について把握し、それぞれの線を結合した字形、サイズ等について十分に理解したうえで練習する必要がある。

まず、線の種類には、直線、曲線の2種類があり、さらに曲線には、右曲線、左曲線がある。ここでいう曲線の左右の区別は、楕円を描いたときに、その向かって右側にある弧を右曲線、左側の弧を左曲線と呼ぶのである。

また、直線、曲線ともに線は、ベースラインに対する傾きによって水平線、垂直線、斜線の3種に分けられる。ベースラインとは、図6で示したように英語ノートにみられる文字を書くための複数の横罫線のうち基準となる線(通常の4線3行の英語ノートであれば下から2本目の線)ことであるが、スペンセリアン法においては全6本の線のうち、上から4本目の線である。なお、図6では、下の2本を省略している。

この水平線、垂直線、斜線の3種類の線のなかで、通常最も多く使用するのは斜線である。スペンセリアン法における斜線の角度には、基本角度(Main Slant)と結合角度(Connective Slant)があり、それぞれ、ベースラインに対して右斜め上方向にそれぞれ52度、30度の傾きである。多くの文字は基本角度(52度)で構成されており、一方の結合角度(30度)とは、一つの文字から次の文字へと結合させる際の斜線に多用される。

スペンセリアン法においては、ほとんどの斜線がこの二つの角度のいずれかを使用しているため、この数値は極めて重要である。この二つの角度をもった斜線がさらに直線と曲線(右曲線、左曲線)に細分化される

二つの角度の斜線に次いで重要なものは、水平線である。水平線には、水平直線と水平曲線があり、水平直線は、小文字のtの横線に使用される(図7左)。水平曲線(horizontal curve)は、上に開いた形の曲線である(図7右)。これは、

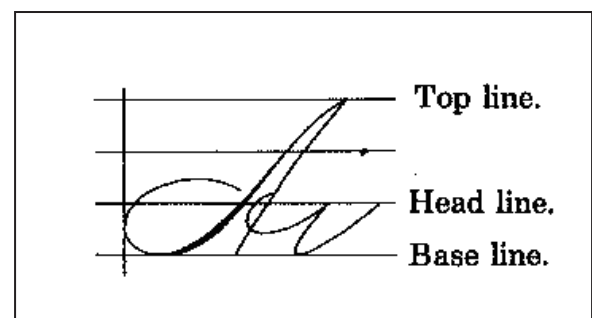


図6. ベースラインとヘッドライン

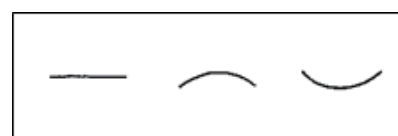


図7. 水平線

水平直線よりも使用頻度が高く w, v, o などの最後の部分で、次の文字への結合部に使用される。

また、2本以上の線を繋ぐ際の曲がり方について押さえておく必要がある。これには、①鋭角結合“angular joining”、②小回転“short turn”、③ループ曲線“loop”、④楕円回転“oval turns”の4種の曲がり方がある(図8①～③、図9)。

まず、①の鋭角結合は、図8の小文字iの上部にあるいわゆるV字ターンである。ターンする点でペンの動きが一瞬止まり、方向転換する。ただし、V字というよりは、ターンした直後にそのままわずかに引き返してから方向転換することもある。次に、②の小回転は、図8の小文字iの下部にあるいわゆるU字ターンであり、ペンの動きを止めずにできる限り小さなカーブで回転することが重要であるとされている。

③のループ曲線は、左曲線と右曲線を小回転でつないだ曲線で、この2曲線が交差しているものである。最後に、④楕円回転(図9)は、主に大文字を書く際に使用する。卵を描くように楕円を書き、左右の曲線を結合する。楕円を書く際の方向として、“Direct oval”、“Reversed oval”の2種の向きがある。“Direct oval”は、外側から中に巻き込んで書く左回りの楕円であり、“Reversed oval”は中から外に広がるように書いていく右回りの楕円である。

以上みてきたように、スペンセリアン法において字形をとるためには、線の種類、傾き、線の結合の知識を押さえておく必要がある。

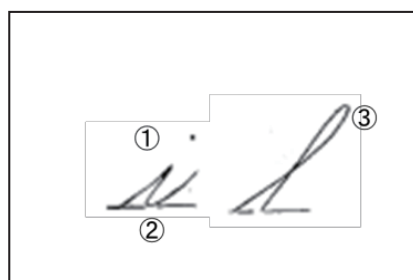


図8. 線の結合

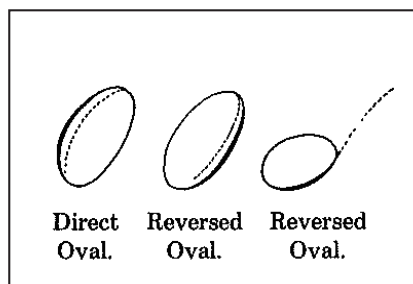


図9. 楕円回転

(4) 7原則 (Seven Principles)

これまで紹介した「線」及びその「曲がり方」の理論を組み合わせて、スペンセリアン法では、7つの原則を示している。この7原則こそ、スペンセリアン法の核となる理論であり、(3)で述べた基本角度(52度)、結合角度(30度)とともに極めて重要である。

この7原則を組み合わせていくことにより、小文字、大文字を構成していくのである。

文字を構成する原則には、「第1原則：直線(straight line)」、「第2原則：右曲線(right curve)」、「第3原則：左曲線(left curve)」、「第4原則：ループ曲線(loop)」、「第5原則：楕円(direct oval)」、「第6原則：反転楕円(reversed oval)」、「第7原則：大文字軸(the capital stem)」の7つが挙げられている(図10)。

このうち、第1原則から第4原則までを小文字で使い、第5原則から第7原則までを大文字で使用する。この7つの原則とその結合法を徹底して身につけることにより、理論上は、すべての大文字、小文字を書くことが可能となる。

ところで、“Key”では、8つの原則が提示されており、この8原則のうち、“System”、“Theory”では大文字の原則を一つ減らして7原則が示されたのである。この8原則について、鈴木(1884)では、「英字八法」と名付けて、この8原則を紹介している。すでに2節においてスペンセリアン法の特徴Ⅱで述べたように、スペンセリアン法における分解結合法は、わが国の毛筆書字教育に伝わる本来の「永字八法」と異なり、はじめに原則にある一点画ずつ練習し、その後それぞれの点画を結合し、一つの文字に完成させる方法であった。すなわち、最初は、第1原則の直線の斜線のみを繰り返して練習させ、次に第2原則の右曲線のみ練習してこれらを結合して一つの文字を完成させるのである。「永字八法」が一つの文字「永」を完成させていく過程において、「永」の文字に含まれる基本点画を学んでいく方法であったのに対して、スペンセリアン法における分解結合法は、アルファベット一文字ずつ学習していくことから、字義を重視しないという点においてもわが国の書字教育とは異質であった。

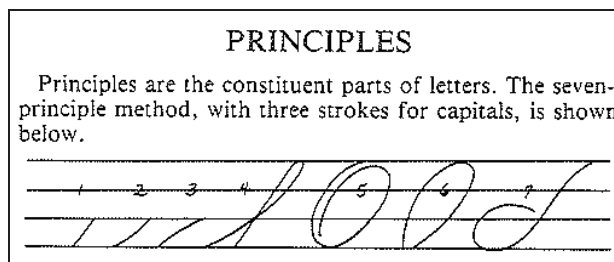


図10. スペンセリアン法の7原則

結びにかえて

本稿では、スペンセリアン法の概要を示し、その基礎理論について述べてきた。スペンセリアン法は、美しさと速さを追求し、両立するための緻密に体系付けられた英習字理論であった。

とはいえ、本稿で紹介しているスペンセリアン法は、あくまでも19世紀のアメリカにおける筆記体書法であり、情報入力機器の普及した現代においてこれをそのまま適用できるわけではない。たとえば、第3節で紹介した姿勢について、机に正対せずに筆記する方法は現代の学校教育では考えにくい。さらに、わが国では、用紙を傾けて筆記するという方法にも、抵抗を感じることが少なくないだろう。

しかしながら、このように、他人に読みやすく、美しい文字を書くことを徹底的に迫る姿勢は、文字言語によるコミュニケーション能力の一つとして現代においても評価できるものであり、今後、筆記体の意義を再考するための一助となるものと考えられる。

本稿では、紙幅の都合により主にスペンセリアン法の概要と基礎理論のみにとどめているが、次稿において、実践的な小文字書法および大文字書法について紹介する予定である。

文献

- 倉沢 剛(1963): 小学校の歴史 I. ジャパンライブラリービューロー, 東京, pp814-819.
- Northend, C. (1874): *The Teachers Assistant*. A.S. Barnes & Company, New York, p179.
- ノルゼント, C., カステール, V. 訳(1990): 教師必読 下. In: 上沼八郎編, 明治大正「教師論」文献集成第3巻, ゆまに書房, 東京, p94.
- 松本仁志(1989): いわゆる「ノメクタ」式教材配列の成立と変遷(1). 書写書道教育 **3**, 54-55.
- 望月久貴(2007): 明治初期国語教育の研究. 溪水社, 広島, pp301-304.

- 文部科学省(2008): 中学校学習指導要領解説 外国語科編. 開隆堂, 東京, p6, p49.
- 森義秀一(1970): 英字の書体と書法. In: 日本ペンマンシップ協会編, 日本のペンマンシップ. 日本ペンマンシップ協会, 東京, pp8-11.
- ペスタロッチャー, J.H., 長田 新訳(1960, 初出1801): ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか. In: 長田 新編, ペスタロッチャー全集第八巻. 平凡社, 東京, pp146-156.
- 佐々木秀一(1912): 小学校の英語科を如何にすべき. 教育研究 **103**, 33-41.
- 嶋次三郎(1873): 童蒙習字各国以呂波. 好文堂・富山堂, 出版地不明.
- 篠田治夫(1948): 英習字. In: 研究社新英語教育講座編集部編, 新英語教育講座 第3巻, 研究社, 東京, pp175-179.
- Spencer, H.C. (1866): *Spencerian Key to Practical Penmanship*. Ivison, Blakeman, Taylor & Co., New York. pp24-33, pp39-40, pp151-157.
- Spencer, P.R. (1864): *The System of Practical Spencerian Penmanship*. Ivison, Phinney, Blackman, Taylor & Co., New York. (復刻版)
- スペンセリアン, P.R., 森 孫一郎訳(1885): ペンマンシップ 4巻. 森本専助, 大阪.
- 鈴木篤三(1884): 英習字本. 巻之1-3, 鈴木篤三, 和歌山.
- The Spencerian Authors (1874): *Theory of Spencerian Penmanship for Schools and Private Learners*. Ivison, Blakeman, Talor & Co., New York. (復刻版)
- 東京茗溪会編(1892): 高等師範学校附属小学科教授細目. 文学舎, 東京. p195.
- 富山真知子(2007): 筆記体が読めない、書けない大学生. 大学時報 **56 (313)**, 98-103.
- 豊永知恵子(2011): 最近の学生のアルファベット筆記体に関する考え並びにペン書写の効用と提案. 仏語仏文学 **37**, 263-280.
- 吉田一郎(1932): 英習字の理論と実際. 大日本英習字研究会, 東京, p9.
- 吉田庸徳(1873): 横文字運筆自在. 東京書林, 東京.

The Theory and Handwriting Method of Spencerian Penmanship

Takashi SUZUKI

Teacher Training Support office, Tokyo University of Social Welfare (Ikebukuro Campus),
1-7-12 Higashi-ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 170-0013, Japan

Abstract : This paper gives an explanation about the theory of Spencerian penmanship, which was one of the most famous cursive handwriting theories in the United States in the 19th century. This volume referred to the history and the basic theory of Spencerian penmanship. This writing skill works to write legible and beautiful letters speedily. Now in Japan cursive writing is considered as shorthand skills and misunderstood as informal writing style. Therefore this study aimed to urge exact understanding about cursive writing and explained the basic theory of Spencerian penmanship, which consisted of position, holding the pen and movements, form, and the seven principles. Spencerian penmanship is valuable as one of the communication methods by literal language and helps to reconsider the significance of cursive writing. (Reprint request should be sent to Takashi Suzuki)

Key words : English education, Penmanship, Cursive, Spencer, Writing Education